

日本イギリス哲学会 第54回 関西部会例会

日 時：2016年7月23日（土）13:00～17:50

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13:00～14:10（討論を含む）

報 告 者：貫 龍太（京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程）

題 目：『サー・ハーキュリス・ラングリッシへの手紙』から考察される

エドモンド・バークの名誉革命論

報 告 2：14:20～15:30（討論を含む）

報 告 者：甲田 太郎（京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程）

題 目：社会秩序の維持という目的から見たマンデヴィルの思想

—『蜂の寓話』以外の著作や道徳改良協会との関係性を手がかりに—

報 告 3：15:40～16:50（討論を含む）

報 告 者：武井 敬亮（京都大学経済学研究科 経済資料センター ジュニアリサーチャー）

題 目：ジョン・ロック『キリスト教の合理性』の再検討

—聖書解釈と政治論を中心に—

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、本年度12月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

（"*"を"@"に直して下さい。）

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会 第54回関西部会例会 報告要旨＞

報告 1：『サー・ハーキュリス・ラングリッシへの手紙』から考察される

エドモンド・バークの名誉革命論

貫 龍太

エドモンド・バークは『フランス革命の省察』において「名誉革命体制」を称揚したとして知られている。他方で、自身の出生地であるアイルランドへの名誉革命の影響をバークが批判的に捉えていたこともよく知られている。そのため、先行研究ではバークの「イングランドにおける名誉革命」論と「アイルランドにおける名誉革命」論との相違が強調されることが多い。

しかし、1792年に出版された『サー・ハーキュリス・ラングリッシへの手紙』において、バークはアイルランドにおける名誉革命の影響の負の側面を強調するだけでなく、名誉革命における諸決定がアイルランド・カトリック教徒の抑圧に帰結しないことも主張する。これはバークが、イングランドとアイルランドに共通する名誉革命原理を提唱していたことを示唆する。

本報告では『サー・ハーキュリス・ラングリッシへの手紙』の名誉革命論を分析し、『フランス革命の省察』の名誉革命論と併せて検討することで、『フランス革命の省察』だけでは十分にとらえきれないバークの名誉革命論の諸相に迫りたい。

(京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程)

報告 2：社会秩序の維持という目的から見たマンデヴィルの思想

— 『蜂の寓話』以外の著作や道徳改良協会との関係性を手がかりに—

甲田 太郎

18世紀英国のバーナード・マンデヴィルの思想を分析する上で常に問題となるのは、主著『蜂の寓話』における「熟練した政治家 skillful politician」がどのような役割を担っているのかということである。この政治家は人々の道徳的教化が可能であるにもかかわらず、なぜ悪徳の一扫は無理なのか。『蜂の寓話』は風刺詩の形をとっているということもあって、マンデヴィルの思想の政治論・経済論・道徳論など全てに一貫性があるかどうかを特定することは困難な作業である。

本報告はマンデヴィルの目的が社会秩序の維持にあったという見解に立つことで、彼の思想に一貫性を見ることを可能にするものである。そのために主著『蜂の寓話』だけでなく、初期の著作や投稿記事を参照する。また、第三代シャフツベリと共にマンデヴィルの主たる論駁対象として知られる、道徳改良協会との関係性も考察する。これらを手がかりに、社会秩序の維持という観点からマンデヴィルの思想に一本の筋を通すことができる。

(京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程)

報告 3 : ジョン・ロック『キリスト教の合理性』の再検討

—聖書解釈と政治論を中心に—

武井 敬亮

ロックの後期の宗教的著作『キリスト教の合理性』（1695年）は、従来、『人間知性論』の第四版（1700年）に追加された第4巻19章「狂信について Of Enthusiasm」（特に理性と啓示に関する議論）と関連付けられ、道徳の基礎付けの問題を中心に議論されてきた。また、その歴史的な文脈に目を向けると、同著作は、当時の「義認」や「三位一体」をめぐる論争や「反律法主義論争」を念頭に執筆されたと言われており（Nuovo (2011), pp. 32-3）、この場合は、特に、ロックの教義論や宗教的立場に主たる関心が向けられた。

他方で、同著作には、「行いの法」と「信仰の法」の関係性をめぐる議論といった、ロックの政治的・宗教的著作に見られる内面と外面（あるいは世俗と宗教）の関係性に関する議論と重なる部分も看取できる。また、同時代において、聖書解釈の仕方自体がひとつの政治的議論の型をなしていたことから、本報告では、上述の先行研究の動向を視野にいれつつも、1680年代にロックが行った政治的議論の延長線上にこの著作を位置付けて分析を行いたい。

（京都大学経済学研究科 経済資料センター ジュニアリサーチャー）